



高度な科学技術の利潤を最大限に引き出す政治的経済の仕組みを装備した産業を装備した消費のシステム：人類の英知が勝ち取った地上の楽園は：それを私たちが文明と呼んできた。十九世紀から十九世紀、ヨーロッパで発芽し、アメリカで成熟した独特の生産消費様式は瞬く間に世界に広がりました。

その繁盛ぶりは、世界人口をこの百年で一倍に押し上げ、来世紀には百億に迫るとしています。エネルギーの使用は十二倍を超え、GNPは数十倍に拡大しました。その一方で、開発された化学物質は一八〇〇万種に達し、吐き出される排出物は年間二九〇億トンを下りません。

一万年間安定していた自然大循環が変動を始め、海の熱塩循環が弱り、最果ての極域まで化学物質の汚染は広がっています。文明の基盤である自然が地球規模で萎縮し始めた時代を人類ははじめて経験しようとしています。

文明の内部に目をやると、資源とエネルギーを開放した科学技術は経済の増大を約束し、その豊かさの上にかろうじて維持される民主主義という運営形態は、瞬く間に大衆消費社会とエネルギーの争奪戦を世界的に繰り広げています。いまや弱肉強食の資本主義は一握りの勝者と多数の敗者を産みだし、深刻な格差構造を造りだしてしまいました。その結果登場したテロリズムという新しい脅威は、この新世界の二極化を予言するものかもしません。

どのような構造上の問題をもっているのか調べてみる価値はありそうです。手始めに、人間の「知恵」について考えて見ましょう。人間の知の行為は大半が自分を求めた所屬する集団の利益になることを求めて飽くなき創意工夫が試みられます。不都合な事実を都合のよい事実に変える業、つまり不可能を可能にかえる「技術」がここには育ちます。これを「利益知」と呼んでよいでしょう。社会生活を営む私達の行動原理と言ってもいいのです。より豊かな生活やより安全な社会を目指すことには誰も反対することはできません。産業から医療、軍事、司法に至るまで、あらゆる分野で目標達成のため「利益知」は発動します。文明以前から備わっていた人間としての本能的な知恵のようです。

次に、この文明に深く関わり合ったもう一つの知恵があります。この知恵は四〇〇年ほど前に、一神教の精神風土の強い影響下に、西ヨーロッパで初めて生まれました。存在する世界のすべてが創造主の主権による被造物として誕生したという独特の世界観の下に形成されました。あらゆる物を創造し、あらゆる現象のルールをお創りになった神は、最後にご自分の像に似せて「人」をつくられ、自らの属性である知性を授けられました。これが「人権」の歴史的根拠となるものです。そして、被造物の全ての管理を「人にまかされたことが、旧約聖書の創世記に明記されています。もうおわかりでしょう。この知恵を我々は「科学」と呼んでいます。

当初の「科学」の営みは、神が造られたあらゆる事物・現象の真相を知る行為が、神の計画を、つまりは神の御意志を垣間見ることにあり、その普遍性や完全さを理解することが、即ち、神への賛美となる信教的な行為だったのです。注目すべき事は、全ての生き物から霊性(Spirit)を取り除き、造られた「もの」として人の前に置かれたとき、「科学」の知恵は産声を上げるのが出来たのです。このようにして誕生した「科学」は自然に対する知識を獲得し、人間の事物に対する新しい見方(あらゆる現象の背後には神のごとき唯一の普遍的な原理が宿つた独特の世界認識の方法を「普遍知」と呼

ばせていただきます。特筆すべきことは、その後、ヨーロッパ近代は、巧妙に人間が神の座にすり替わって行く道を選びました。聖書にその萌芽としてあった、人間に重きを置く考えは、ヒューマンイズムとして強化され、地上世界を人間にとってより改造していき道を開き、開発の正当性を獲得していきました。一方で、「科学」は当初の信教的要素を削ぎ落とし、手段にしか過ぎなかつた知識の獲得が、「科学」の正当な存在理由となり、今までは桁違いの確実で精度のよい知識を世界に提供できるようになりました。しかし、これだけでは文明の奇蹟は起きません。

前世紀初頭、近代国家間の熾烈な競争が次の奇蹟を生み出したのです。「普遍知」と「利益知」との本格的交渉が、史上最強の開発力である科学技術を生み出しました。その代表的な例がマンハッタン計画(原子爆弾製造計画)です。この国家的事業の成功によって科学と技術のパートナーシップが築かれ、戦後、国家は科学技術を柱に国家の存亡をかけて開発事業を推進するようになったのです。その結果、一時的な甘い果実はたちまちに消費され、まだ見ぬ子孫に、とてつもなく重い負債を残そうとしています。この文明の特徴は、現在の人間が未来の財を先取りし、未来の世代に負の遺産をつけ回し、それを可能とする恐るべき仕組みを生み出したところにあるのです。先ほどの環境異変や資源の枯渇、内部の構造的欠陥はこのタイプの生産・消費システムが明らかに持続的でないことを示しています。

さて、最後に、この文明に欠けていた大事な知恵があります。仏陀の知恵です。自己の利益が他者に対して一方的に開かれ、他者に利益を与えることによつて成り立つ慈悲の知恵です。これを私に「臨床知」と呼ばせていただきます。この「臨床知」は、「私」という人間を正面から問うことの出来る唯一の「知恵」と言つていいでしょう。前二つの「知恵」にはない機能です。「人権」を基本に、「自由」と「平等」を歌い上げた二〇世紀の個人主義的人間文化は、今、深刻な反省に迫られています。一見通りのよいこのお題目は、実は不可侵の「人権」を自覚した「個人」が、「自

由」に戦つたためのリングルとして「平等」を主張しているに過ぎないことがわかってきました。戦う武器が素朴な時代は余り問題がありませんでした。しかし、「科学技術」はあまりにも強大な武器です。使い方によつては、人類全体いや地球全体に再起不能の結果をもたらす能力を持つています。残念なことに、パンドラの箱はもう開けられませんでした。悪の連鎖はいつでも稼働可能な状況です。「他者」との関係においてのみ、はじめ「私」が意味あるものとなる。「臨床知」の基本に戻れば文明の暴流を慈悲の大海に転ずることが出来るかも知れません。人間の知恵が生み出した偉大な文明の存亡にあたり、仏陀の知恵が大きな可能性を秘めている思いがします。

2006/07/23

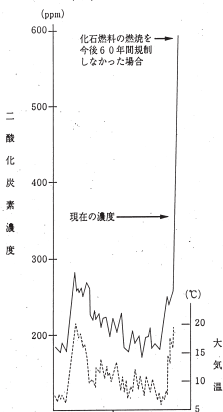


アラル海が半減



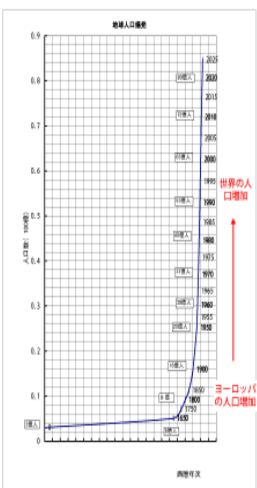
北極海の氷が半減

地球の平均気温と二酸化炭素濃度 (158,000 B.C. - 1994 A.D.)



出所: Ice core record, Antarctica

世界人口増加



出所: World population growth